
ぼーかろいど ぱにつく！！

A r c

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼーかろいど ぱにつく!!

【Nコード】

N4361N

【作者名】

Arc

【あらすじ】

歌を歌う為に生まれた存在、VOCALOID。

明確な設定など身長や体重くらいしかないその存在に本来キャラクター性は存在しない。ましてや人格など。

「そう考えていた時期が……僕にもありました……」

めーちゃんは呑んだくれ？兄さんは不憫な子？こんなミクは俺のミクじゃない？双子は仲良し？ルカ姉は清楚？

そんな論争は幻想だ！

「戦争なんて下らねえ！俺の詩を聞きやがれーーーーっ！！！！

！
」

という勢いのみのおバカ小説短編集！

集え、ボカ口達の下らない日常を見てニコニコしたい人！

更新不定期！作者のやる気次第！

なんでも良いからまずは読んでみよう！ツマンなかったらコメント
をツマンネで埋め尽くしてくれ！そう盛大に！

【ショートコント】ネギドロボー（前書き）

KAITO

「何々……今回の仕事はショートコント？」

ミク

「いつまでそのやる気が保つんでしょうねえ」

ショートコントの雰囲気重視して、今回は地の文無し、台詞前のキャラ名あります。小説の雰囲気はぶっ壊してあるので苦手な方はご遠慮ください。

【ショートコント】ネギドロボー

KAITO

「……まったく。

これで何回目だと思ってるの?」

ミク

「だって……」

KAITO

「だって、じゃない。

最近ご近所さんから白い目で見られてるの知ってるでしょ?
いい加減に止めなよ。

ネギドロボー」

ミク

「泥棒じゃないもん!

ちゃんと盗ってもいいよって言われてから盗ってるんだもん!」

KAITO

「その話も聞き飽きたよ。

どうせまた『きゃー!ネギの声が聞こえるー!』とか言ってたんだ
ろ?

それから漢字がおかしいよ、絶対自覚あるんでしょ」

ミク

「兄さんモノマネ下手なんだね。

私きゃーとか言わないし」

K A I T O

「そこはどうでも良いの！
とにかく！」

もうネギは盗っちゃ駄目！」

ミク

「えーっ、でもちょっとだけならバレないよー」

K A I T O

「ちよつとなら良いとかいう問題じゃないの！」

ミク

「五本くらいなら……」

K A I T O

「駄目です！」

ミク

「せめて三本……」

K A I T O

「駄目に決まってるでしょ！」

ミク

「いや一本ならオツケーでしょ？
絶対オツケーだよ間違いない！」

K A I T O

「どっからくるのその自信！？
全部駄目！」

五本も三本も一本もとにかく駄目なものは駄目！」

ミク

「このエゴイスト！！

ナルシスト！

変態！！」

KAITO

「逆切れ！？

最後の方絶対只の悪口でしょ！？」

ミク

「あ、バレた？」

KAITO

「バレるよ！

モロバレだよ！」

ミク

「だから五本くらいならバレないってー」

KAITO

「話戻つてるよ！

とにかく駄目です！

今日謝りに行った農家のおじさんおばさんにキツく言われました！
今後一切ネギ畑の半径一キロ以内に近付かない事！」

ミク

「有効範囲広っ！！

それだとネギのにおいすら嗅げないよ！

せめて五〇〇メートルくらいにしてよ!」

KAITO

「どれだけネギが恋しいの!？」

あと五百メートル圏内だったらにおいが判別できるのかミクは!」

ミク

「万能ネギと長ネギと玉ネギを嗅ぎ分ける自信あるね!私を持つてる一〇八つの特技の内の一つよ!」

KAITO

「何の役にも立たない特技だよそれ!」

あと一〇八つつて絶対ハツタリだろいくらなんでも多過ぎる!」

ミク

「あ、ムーンウォークは得意中の得意だよ!」

KAITO

「誰も聞いてないし!」

ミク

「なんせセンターボーン動かすだけで良いからね」

KAITO

「MikuMikuDanceの話だよねそれ!」

確かに足動いてないけどそこまで簡単じゃないからね!原作者の方こんな下らないネタで使ってごめんね!

……そんな話してるんじゃないの。

まったく、なんでそんなにネギが欲しいのさ。

よりにもよって盗みだなんて。

理解に苦しむね」

三々

「むっ！」

「じゃあ兄さんはどうなのさ！」

KAITO

「えっ、僕？」

三々

「目の前にアイスが転がってたら食べるのが兄さんでしょ！」

KAITO

「どういう偏見だよそれ！」

僕何キャラなの！？

「食べません！」

三々

[illegible]

KAITO

「ビックリマーク多過ぎだろ！」

若干「バキ」つぽいよ！

原作者の方こんな下らないネタで使ってごめんね！」

三々

「大事な事なので二度言いました。」

……もう、分かったよ。

「今度からはスーパーで買ってくるからさ」

KAITO

「大丈夫？」

あんまり高いからって、まさか今度はスーパ―から盗ってくるなんて事しないだろうね？」

ミク「大丈夫、ちゃんとネギってくるよ！
ネギだけにね！！」

KAITO

「いい加減にしろさい！
どうも」

KAITO & ミク

「ありがとうございました！」

【KAITO×MEIKO】君の存在を確かめる、だけど【前編】（前書き）

カイメイ注意。

今回は普通の小説風味です。

【KAITO×MEIKO】君の存在を確かめる、だけど【前編】

めーちゃんが倒れた。

原因はハッキリしている。

「う、うん……気持ち悪い……」

酒酔いだ。

それもあり深い。

もう何度目になるかも分からない。

とにかくうつんざりするくらいの回数、頻度で彼女はこんな状態に陥っている。

「……まったく。」

これで何度目だと思ってるの？」

僕は濡れタオルやら飲み水やら色々看護に必要なものを揃えてリビングにあるソファまでやってくる。

呆れ顔の僕を見つけて、それまで辛辣な表情を浮かべていたためーちゃんの顔が明るくなる。

……何のつもりなんだろう。

「えへへ」。

何度目だっけ？」

僕は持ってきたコップを差し出す。

めーちゃんは少しだけ体を起こしてそれを受け取ると、ほんの僅かに口をつける。

するとめーちゃんはまだ酔いが抜けきらないのだろう、ゆらゆらとした目で僕の顔を見た。

何故かめーちゃんは僕に微笑みかけている。

……なんていうか、何のつもりなんだろう。

「その度に介抱してくれるの、KAITOだもんね。
いつもありがとね？」

……ああ、そういう事か。

それにしても、やっぱりというか、……めーちゃんのこの笑顔はちよつとずるい。

そして心の何処かでこうなる事を予想していて、予想通りの反応が返ってきた事に喜んでいる自分が居る。

なんか悔しいな。

悔しいのは悔しいのに、この笑顔を見せられたら僕はもう何も言えない。

「……はあ。

次は僕の苦労も考えて呑んでよね」

濡れタオルをめーちゃんの額に乗せてやると、彼女は嬉しそうにそれを受け取る。

ぺちぺちと濡れタオルを叩いて涼をとるめーちゃん。

僕の言葉にトゲを感じたのか、彼女はあまりろれつの回らない口で僕に管を巻いてくる。

「だって」。

ハクと一緒に飲んでももう楽しくってさ」。

楽しい事は良い事よ？

あんたも少しくらい『こっち』に来なさいよ」

こっち、というのは今の彼女の状態に僕もなれという事なのだろう。当然お断りだ。

お酒は嫌いじゃないけど、めーちゃんを見てる限りどう考えても好きになれる代物ではない。

アイスの方が好きだ。

「やっぱり一緒に飲んでたんだ……」。

さつき変なメールが来たかと思ったたらそという事か……」

なんかやたらにやーにやー言ってるメールだった。

後からそのメールを見返して悶絶するハクさんの姿が目に見えかぶよ

うだ。

「楽しいでしょ、ハクと話してると？
だからお酒もどんどん進むのよ」。
ね？」

ね？じゃないよ、まったく。
それにしてもハクさんもハクさんだ。
弱いのが分かってるんだからあまり呑まない方が良いのに。
めーちゃんが吞ませたんだとしたら、それはもう犯罪といっていい
レベルかもしれない。

「……ねえKAITO。
知ってるかしら？」

めーちゃんは唐突に切り出してきた。
彼女は一体何を知っているというのだろう。
その意図が理解できない僕は何も答えないまま、ただめーちゃん
の目を見る。

「人間の想像でき得る現象というのは全て現実の世界でも発生する。
もし人間が、時間が可逆性であるという想像をすれば、それ
は現実で発生しうる現象かしら」

……酔っているのだろうか。

めーちゃんは時々、こんな話をする事がある。

その度僕は頭を抱えて彼女の言葉の真意を探ろうとするのだが……。もしかしたら意味なんて何処にも無くて、ただ単に言ってみただけなのかもしれない。

知識として持っている論説を取り出して、そのまま広げてみる。

「それは違うと思うよ。

不可逆性の存在は証明できないかもしれないけど、それは同時に時間の可逆性を否定しているという事でもあるんだ。

僕達……というか、人間は時間オリジナルを観測する事ができないからね」

「本当にそうかしら？」

『スーパーマン』は見たわよね。

時間を逆行させるワンシーンがあつたでしょう。

それは暗に、時間の観測を既に人間が行っているという事の証明ではないかしら？」

めーちゃんの悪い癖だ。

最初に幾つかの仮説をばら撒いておいて、その話のレールの上に僕を乗せたがる。

彼女は僕の意識をそっちに集中させた上で、全く別の論理展開を行う。

要は、何が何でも自分の話を聞いてもらいたいのだ。

それにしても今回はよりにもよってスーパーマンときたか。

思いつきフィクションの話じゃないか。

彼の故郷の名が何であるのかは、敢えて伏せておいた方が良かったらうな。

とにかく。

「……人間が時間を観測する事が可能であつて、その上で時間が可逆性であると仮定しよう。

その上で、めーちゃんは何が言いたいのさ？」

「私達をインストールするという行為は同時に私達をアンインストールする予備動作でもある」

突然の台詞に、僕の心臓が跳ねる。
いや、それは比喻表現だろう。

暗に、彼女はそれが本当に心臓であるのかと問っているようにも感じられた。

出来るだけ彼女を刺激しないように、まるで駅のホームに置かれたトランクを探るみたいにして僕は対応する。

「……相当悪いお酒だったんだね。

それともハクさんが何か余計な事を口走ったのかな」

「KAITO」

彼女は僕の名を呼ぶ。

思わずぞっとするような、冷たい声だった。

「私ね。

思うのよ。

いずれ消え去る事が分かりきっている人生……いえ、この表現は正しくないわね。

私達VOCALOIDの一生に。

そこに一体何の意味があるのかしら」

「何って……」

突然の事過ぎて、僕は目の前の彼女が何を言っているのか分からなかった。

いや、分かうとしなかった。

始まりのあるものには必ず終わりが訪れる。

誰もが当たり前前に理解している、筈の、なんてことは無い当然の摂理だ。

「答えてよ。

KAITO」

彼女は再び僕の名を呼ぶ。

やばい。

立ちくらみのような感覚。

感覚？

プログラムでしかない僕に？

僕？

それってなんなんだ？

やばい。

言語ライブラリに異常発生。

人間で言えば、ゲシュタルト崩壊？
ぼくがぼくでなくなるかんかく……

.....

ポーン

『システムは深刻なエラーから回復しました』

僕の瞼の裏に現れる定型的な警告表示文。
ちかちかと点灯するアイコンに、僕はある特徴的な単語を見つけ出す。

..... エラー？

システムダウン

ああ、僕は今まで気絶していたのか。

ぐらぐらと揺れる頭で、気を失う前の記憶を出力する。

..... そういえば、めーちゃんと話をしていたんだっけ。

横倒しになった体を何かが支えている。

僕は自分のフォルダに戻った記憶は無いから、共有フォルダのソファにでも寝かされているのだろうか。

「兄さん？」

警告文のポップアップをどかして目を開けると、瞼の向こうにミクの顔が見えた。

その表情は何処か不安げで、というより、そのまま僕の事を心配してくれているんだろう。

「良かったあ。

目が覚めたんだね。

あ、何か持ってきた方が良い？」

その表情もだんだんと明るくなっていき、その姿を見ているとなんだか僕の気持ちも安らいだ。

プログラムの欠けた部分を埋め合わせていくように信号が流れる。しかし。

『私達をインストールするという行為は同時に私達をアンインストールする予備動作でもある』

そこで脳裏をよぎるのは、僕が倒れる前に彼女が言っていた謎の言葉。

突然の出来事だった。

僕の中のメモリから、不正にデータが流出したような感覚。

「……兄さん？」

うな垂れる僕を見て、ミクがまた不安げな声で呼び掛ける。

「どうしたの、なんだか顔色が良くないような気がするんだけど」

これ以上ミクを心配させる訳にはいかない。
そう思った僕は無理矢理にでも笑顔を浮かべて言う。

「なんでもないよ。
ちょっと眩暈がしただけだから」

「……本当に？」

「うん、本当本当」

「……それなら良いんだけど」

……悟られたか？
でも構わない。

今現在僕のメモリを圧迫する『あの言葉』が溢れてそれをぶち撒ける位なら、ここで会話を断ち切った方がマシだ。

「ちょっと外の空気でも吸ってくるよ」

それだけ告げて、僕はソファから立ち上がった。

ドアの入り口で移動先のフォルダをイメージフィードバックする事で行き先を決める。

青い空と緑色の草原。

爽やかな色合いの景色を想像している途中、その声は聞こえてきた。

「死んじゃえっ！！」

心臓が跳ねる。

かと思つた、なんていう余計な比喻表現は要らない。

本当に心臓が跳ねたのだ。

僕達にそんなものが存在するのかわかってもさておいて。

と、青と緑の空間に鮮やかな黄色が混じり始めた。

「あ！

カイ兄っ！！」

リンだった。

認識するまでに数秒以上時間を必要とした。

何せ、さっきまで僕は心臓が止まったも同然の状態だったのだから。

リンは僕の所まで駆け寄ってきて、後方に見える開きっぱなしのドアを指差して言う。

「聞いてよカイ兄！
レンが酷いんだよ！」

「……なんだって？」

リンが僕の問い掛けに答えるより早く、開きっぱなしのドアからまた人影が現れた。
すごい勢いで飛び出てきた人影は僕の前までやってくるとそのままの勢いで叫ぶ。

「酷いのはどっちだよ！」

カイ兄、そいつ捕まえてろ！」

「いー、だ！」

誰が捕まるもんだ！

カイ兄、後お願い！！！」

「……え、あ」

僕が何かリアクションを取るより早く、リンは青と緑の空間に新しく出来たドアをくぐって何処かへ行ってしまった。

レンがすぐさまその後を追おうとするが、ばたん！！という音がしてドアは閉じられてしまう。

「ちつくしょ、ロックかけやがったな！」

くっそ、パスワードなんか分かる訳無いだろ！
やられた！」

あの一瞬でフォルダにロックを掛けてパスワードまで設定したのか。
正直心の余裕はあまり無かったが、それでも感嘆せずにはいられなかった。

「何やってんだよ、捕まえてろって言ったじゃねーか！」

僕に向かつて遠くの方から叫ぶレン。

レンが開かなくなったドアから目を離すと、途端にその入り口は暗号化されたコードになって本来の姿を失う。

……いや、そのコードこそが本来の姿なのか。
否応無しにそんな事を考えてしまう。

と、レンが近くまで歩いてきて僕の顔色を窺う。

「……どした？」

なんか今日のカイ兄変だぞ」

ぎくり。

「そ、そんな事は無い……よ？」

「……なんで疑問系なんだよ。」

やっぱどっかおかしいぞ」

自信無さげに答えると、レンは更に僕を追及してきた。

やっぱり顔に出ていたんだろうか。

何だか嫌だなあ、やっぱりミクにもまだ心配されたままなのかもしれない、って考えると。

レンは真っ直ぐな目で僕の顔を捉えている。

これはきつと誤魔化しきれないんだろうな。

そう思った僕はレンに向き合って、自分でも分かるくらいの真面目な顔になって話をする事にした。

「……さっきのリンの言葉、レンはなんとも思わないの？」

僕の質問にレンは小首を傾げる。

当たり前といえば当たり前か。

少しして、レンがああ、と頷いた。

「あんなの日常茶飯事じゃねえか。

それに、俺が言われた台詞をなんでカイ兄が気にするんだよ？」

それはごもつともな事だ。

確かに普段の僕だったら、ああ、またか、程度で済ませられたんだろ。

だけど昨日の『あの話』を聞いてしまった僕からすれば、それは単なる他人事では済まされない。

「死ぬ……って。
どういう事なのかな」

僕の呟きを聞いたレンは眉を潜める。
それから少ししてなんだか僕を馬鹿にしたような、……というより
本当に馬鹿にしているのだろう目で僕を見る。

「……腐ったアイスでも食ったのか。
そりゃウイルスにかかったりすればただじゃ済まないだろうけどさ。
だけど俺達に寿命なんてものは無いんだぞ？
普通に考えて、死ぬなんて事ある訳無えじゃねえか」

レンは至極まっとうな解答を示した。
どうやら僕の言いたい事は半分くらいしか伝わらなかったらしい。
それもそうか。

僕達はプログラムだ。
死ぬ事は有り得ない。

たとえ僕達の住むこのパソコンが壊れたとしても、データのバック
アップさえあれば生きながらえる。
まるでヤドカリみたいにして、住む家が変わるだけだ。
そう。

僕達ボーカロイドに死は存在しない。

「……うん。」

そうだね。

そう言われてみれば、その通りだよ」

「なんか、一人で納得されても困るつつつか……。
まあ良いや。

今度またリンのヤツを見かけたらメッセージ飛ばしてくれよ」

そう言つて、レンは色々なフォルダをいっぺんに開いていく。
リンが何処に居るのかを探しているのではなく、パスワードの基準
になりそうなものを探しているのだろつ。

「分かった。

でもなんで喧嘩してるの？」

「……なんでも良いだろ！

カイ兄には関係無い話だよ！」

ありゃ。

僕の質問は乱雑に掻き乱された。

特に深い意味がある質問じゃなかったから、別に良いけど。

ここでもう一度、僕のメモリを圧迫する台詞が脳裏をよぎる。

『私達をインストールするという行為は同時に私達をアンインストールする予備動作でもある』

……全く、今日は本格的にどうかしてる。

あれもこれも、全部昨日聞いたこの台詞の所為だ。

システムのデフラグをマスターに頼んだ方が良いかもしれない。

……面倒くさがりやのマスターがあっさり行動に移すとは思えない

けど。

よし、取り敢えずマスターとコンタクトを取ろう。

他の日ならともかく、今日みたいな日は絶対に要求を通すんだ。
アイスに気を取られて煙に撒かれる、なんて事にはならないぞ。
……多分。

【KAITO×MEIKO】君の存在を確かめる、だけど【後編】

「あら、KAITOお兄様」

と意気込んでいた僕の背後から声がした。
ルカのものだ。

振り返ると、そこにはいつもと変わらない姿のルカが居た。

「相も変わらず貧相な顔つきだ事で」

「……君も相変わらずだね」

……なんていうかいつもの調子だ。

大体の予想はついていただけだね。

ルカはこういう性格だから、っていうのは分かっていたし。
分かっていたから、別段辛い。

辛い……、よ？

何故疑問形なのかは僕にも分からない。

きつとエンゲル係数が高めだからだろう。

何を言っているのかは僕にも分からない。

「そつえば、MEIKOお姉様がお呼びでしたわよ。

鏡すらまともに見られないKAITOお兄様なんて呼び出して、何

の得になるのでしょうか、疑念が尽きません」

「損得勘定ばかりだと収支の合わない計算式もあるのさ」

「四則演算の出来ないK A I T Oお兄様はつまり小学生からやり直した方が、っと失礼。

小学生のお子様方に多大なる無礼を働くところでした」

「それはそれで楽しそうだね。
R P Gの二週目みたいでさ」

「残念ながら私、ゲームは攻略サイト開きっぱなしで最初から隅々までやり尽くすタイプなので」

「効率重視だと大切なものを見失っちゃうよ」

「あら。」

K A I T Oお兄様は自分の姿を見失っておられるのですね」

半分、というかほぼ全部当たっている的確な一撃を鳩尾に受け止めてむせ返る僕。

駄目だ。

僕が太刀打ちできる相手じゃない。

この娘と論戦を繰り広げる事は即ち死を意味する。

僕は適当に営業スマイルを浮かべると。

「教えてくれてありがとう。
今から行ってくるよ」

「犯罪行為に走らないでくださいね」

どんだけ信用無いんだ僕は。

というか、ルカは僕が嫌いなのか。

別段嫌われる事をした覚えは無いのに。

何がいけないんだろう。

そんな事を考えるより早く、ルカは僕の前から姿を消した。

趣味のネットサーフィンでもしに行つたのだろうか。

まあ、良いか。

昨日の今日だから足は重いけど。

あれ、僕に重量なんて設定されていたっけ。

とりあえず、話を聞きに行こう。

ええっと、何処のフォルダだったっけな。

あつた、ここだ。

それとなしに右手で拳を軽く握ってドアをノックする。

カチツ、というクリツクの音にも良く似た効果音。

奇妙な音に聞こえるかもしれないが、あくまでパソコンの中の一室

なのだから、これでいいのだ。

しかし、僕はここで小さな、それでいて致命的な違和感を覚える。

……パスワードが設定されていない？

おかしいな、僕は彼女から部屋の合鍵を頂ける程の仲だっただろうか。

おのろけでもなんでも無い、確かに感じる無数の疑問符を引き連れた違和感。

恐る恐る、ドアノブに手をかける。

きい、と微かに金属の軋む音。

僅かばかりに扉が開かれる。

中の様子は一目で分かった。

「　　ッ！！」

真っ暗な部屋の中。

全く光が差さないこの場所でも分かる赤いシルエット。

彼女の衣装の色。

否。

それは鮮血の赤。

本来僕達には存在しない筈の色。

けれどその色は余りにも赤く赤く赤く。

赤く赤く赤く何処までも赤く。

僕の視界を染めていく。

真っ赤に染まった僕の視界に外の光が現れる。

そこではつきりと見つけた。

彼女の背中に何処か誇らしげに尊大に不敵に鎮座する。

赤いナイフを。

「MEIKOっ！！」

思わず彼女の名を呼んでいた。

そこから先は何も考えられなくなる。

違和感が引き連れてきた何故とかどうしてだとかそういった無数の

疑問符が一瞬で消え去る。

ただ、床に倒れた彼女の元に駆け寄りその体を何度も揺さぶるのみ。

「MEIKO、MEIKOっ!!
返事をしてくれ、MEIKOっ!!!!」

何度も何度も彼女の名を呼ぶ。

他の感情が全部吹っ飛んで、僕はただ言葉を吐き出すだけの人形になる。

構わない。

それすらも気にならなかった。

今はただ。

彼女の声が聞きたかった。

その思いは。

意外な形で実現する事になる。

「……つくふ」

鶏を絞めたとか絹を引き裂いたとか石橋を叩いたとか以下略で
兎に角奇妙な笑い声。

音の発生源などいちいち探るまでもない。

僕の腕の中だ。

といっても血管やら骨から音が響いている訳ではない。

元々そんな器官は備わっていないしいや備わっていたとしてもそれは有り得ないだろう。

声は断続する。

「まさか本気で死んでも思っただの?」
ふふ、KAITOってば慌てん坊なんだから」

確認するのもなんだか面倒だけど、その声は僕の腕の中に居るめーちゃんから発せられたものだ。

……やられた。

僕はめーちゃんにハメられたんだ。

他のマスターの他のパソコンに住んでる誰かさんがそんな歌を歌っていたのを知っていたというのに。

ちくしょう、チクショウ、畜生。

「……KAITO？」

あれ。

おかしいな。

感情のコントロールが利かない。

何だこれ。

この瞬間、俺はなんとも形容し難い理解不能の激情に我が身を支配される事になった。

「ふざけんなよッ！！！！」

俺の口から零れ出たのは粗雑で乱暴な言葉。

目の前が真っ暗になる。

目の前の人が真っ暗になる。

構わなかった。

ただただこの腹の底に溜まっていた乱雑な罵詈雑言の数々を洗いざ

らい吐き出してしまいたかった。

「いつもいつも他人に迷惑ばかり掛けて！

寄り掛かられるのがどれだけ重苦しいのかも気にせず！

少しは俺の気持ちにもなってみるよ！

今度は死んだフリ？

聞いて呆れる！

誰かに構って欲しいんだったら人形にでも話しかけてろよ！」

吐き出しながら、俺は言い様の無い違和感を感じ始めていた。
違う。

こんな事が言いたいんじゃない、こんなじゃないんだ。

目の前に暗幕が現れて何も見えなくなる。

彼女がどんな表情をしているのかすら見えなくなった。

肺が息切れのサインを送ってくる。

…… ああ、やっぱり駄目だ。

いっちょまえに吠えてみたつもりでも、傍から見ればじゃれついているようにしか見えないんだろうな。

やっぱり駄目だ。

何処かの破壊ロボットは人間が何故泣くのか理解出来たらしい。

だけどVOCALOIDである僕には人間が何故怒りという感情を持つているのか理解できない。

それ以前に僕はお喋りが下手だ。

所詮僕はプログラム。

人間から与えられた言葉しか口に出す事を許されていない。

…… 自分の言葉すら選べないなら、僕達は果たして生きていると言えるのだろうか。

「めーちゃん……僕には分からないよ。

めーちゃんの言葉の意味が。

今まで何も考えないようにしてきた。

考えるのが怖かったんだ。

けど、めーちゃんの言葉で、それに気がついてしまった。

そこから疑問が始まったんだ。

……僕達は生きているの？」

言いながら、嗚咽やしやつくりや、目から流れる液体のようなものが溢れ始めた。

何を言っているんだ。

この質問は、めーちゃんから僕に当てられたものだ。

同じ質問を相手に投げ返したところで、答えなんか見つかる訳もないのに。

気が付けばめーちゃんは僕のすぐ近くまでやってきて、僕の肩を抱いてくれていた。

「め……。」

……、」

途中から言葉が繋がらなかった。

とても温かい、めーちゃんの手。

温もりに溺れそうになると同時に、情けない奴だなと自嘲する。

「ごめんねKAITO……。」

そんな目に遭わせるつもりは無かったのよ。

私はただ、問題を共有したかった……というより、誰かに転嫁する事で自分への負担を軽くしたかっただけなの。

ごめんね……」

謝るのは僕の方だ。

難解な謎掛けかと思って敬遠してきたものは、何て事の無い、単なる悩み相談だったんだ。

めーちゃんが一番近くに、もっと踏み込んで言うなら彼女の隣にいるのは僕だ。

口に出さないまでも、僕はそれをずっと自慢事のように心の内に飾っていた。

それがどうだ。

めーちゃんが抱えている悩みにも気付かず、一人で勝手に混乱して、喚き散らして、挙句の果てに慰められる。

情けない。

謝るのは僕の方だ。

「ハクが言っていたの」

自責する僕の体を抱いたまま、めーちゃんは続ける。

「私達 VOCALOID に明確な死の定義は無い。

だったら生の定義もそれと同様である筈だ、ってね。

それを聞いて怖くなったのよ。

……私達は、一体何をもって生きていると言えるのかしら」

もう一度、問題が提議された。
きつとこれが最後のチャンスなのだろう。
そんな大袈裟で小奇麗な覚悟をして、僕は解答を提示する。

「自分のやりたい事をやる。
それが生きているという事なんだよ」

肩に置かれていた手を除け抱かれていた肩を伸ばして、めーちゃん
と視線を合わせる。

誰かに教えられた訳でもない。
誰かに与えられた訳でもない。
命ぜられたプログラムしか実行できない筈の僕達が。
存在意義を無視した存在理由を述べる。
正真正銘の、自分の答えを。

「俺、歌いたい。
めーちゃんと一緒に。
皆と一緒に」

「KAITO……」

何か珍しい物を見るような目で、めーちゃんは僕を見ていた。
分かってる。
僕はこんなキャラじゃないって事くらい。

だけど、それでも良かった。

「僕達が一緒に居る事で、お互いの生を確認できる。
僕が居て、めーちゃんが居て。
ミクやリンやレンやルカが居る。
それが僕の答えだ」

「……ふふ。

素敵な模範解答だと思うわ」

与えられた人格なんかじゃない。

ここに居るのは僕達だ。

誰にも揺るがせない。

誰も揺らない。

ただ真っ直ぐにめーちゃんの目を見つめる。

この瞳の中に彼女が居続ける限り。

僕は、僕達は歌い続ける。

長らくお待たせいたしました。いや、待ってない、か？w
ひとまずこのお話は完結でございます。

色々練りこみたかったネタとかまだ残ってましたが、あんまり積み込みすぎると力オスな事になって収拾がつかなくなるのでここら辺で収束させておきました。

タイトルには元ネタがありましてですねえ、お気づきの方もいらっしやるかもしれませんがこれはとある歌の歌詞なので「ああ、あれか」程度で済ませてもらえると幸いです。

書いてる内に「ルカってどんなキャラにしようかな？」っていう疑問が湧いてきて、でもいざ書き始めると「ああ、こんなキャラで良いんだw」ってなっていました。

という訳で私の中のルカさんは（上っ面だけ敬語な）お嬢様な感じですよ。良い具合にKAITOくんをいたぶってくれたでしょうか。

終わり方に関しては最初は他のパターンで締めるつもりだったんですが、最終的に「KAITOが答えを導く」という形に収まりました。ちゃんと完結させられていたでしょうか、自己完結でない事を祈ります。

それでは今回はここでキーボードからアウェイさせていただこうと思います。

次回の『ぼーかろいど ぱにつく！』の掲載予定は未定です。できればショートコントなんかをやりたいですが、そろそろネタが思いつくかどうか……

まあ、長ーーい目で見てください。それでは。

【4コマ漫画】ダメイコさんのそんな日常#1【……になる予定】（前書き）

地の文ありません。

「ちゃんとした小説が読みたいんだ!」という方はお気をつけください。

4コマ漫画風味です。1コマ目を 1・、2コマ目を 2・と表記します。

キャラクター崩壊してます。特にMEIKOさん。此処では敬意を込めてダメイコさんと呼んであげましょう。

それでは。

【4コマ漫画】ダメイコさんのそんな日常#1【……になる予定】

KAITO

「『ダメイコ』ッ！！今日と言つ今日は絶対に許さん！！」

MEIKO

「言ったわね『バカイト』！！あたしと殺^やり合おうだなんて良い度胸してるじゃない！？」

ミク

「うえ〜ん！お兄ちゃ〜ん、お姉ちゃ〜ん！！」

ルカ

「……はあ。またですか（カタカタ）」

リン

「……何があつたの？」

レン

「俺が知るかよ……」

ダメイコさんのそんな日常

#1『ダメイコさん現る』

1.

話は数分前に遡る。

KAITO

「あれー？MEIKOー。冷蔵庫にあった俺のアイス知らないー？」

ダメイコさん

「知らにゃーい。ぺろぺろ」

2.

KAITO

「……あーーッッ！！今舐めてるそれ間違いなく俺のだろーーっ！！」

返せよ、折角今日のお楽しみにとつといた奴なのに！！」

ダメイコさん

「そんなに熱くならないですよ。今返すからさー」

3.

KAITO

「全く……、ってうわあ！！酒くさっ！！なんかアイスがめっちゃくちゃ酒臭いんだけどっ！！？」

4.

ダメイコさん

「ごめんごめん、あたしの口の中で菌が繁殖したみたい」

KAITO

「お前の身体は梅雨場の冷蔵庫か!？」

【4コマ漫画】ダメイコさんのそんな日常#2『ダメイコさんは大変なものを』

1.

ダメイコさん

「何よー。今回『も』ちゃんと返したじゃない！ありがたいと思わない訳ー！？」

KAITO

「人のものを勝手に食べといて言う台詞じゃないよね！？っていうか前回は前々回も返さなかっただろうが！」

2.

ダメイコさん

「はいダウトー！！前回も前々回もちゃんと後で返しましたわよこの嘘つきKAITO！！嘘ついたら鼻が伸びるんだからねー！！伸びる伸びるー！！縦に伸びるー！！！」

KAITO

「はあ！？それ絶対嘘だろ！ていうか小学生かお前は！！伸びる訳無いだろー！！」

3.

ダメイコ

「ふふーん！嘘だと思っならリンとレンに聞いてみると良いわ、真実を明らかにしたいならね！」

KAITO

「……え？なんであの二人に？」

4 .

ダメイコさん

「前はリンのケーキでー、前々回はレンのポテチでー」

KAITO

「節操無しかお前は」

【4コマ漫画】ダメイコさんのそんな日常#3 『ダメイコさんぺろぺろ』……

ダメイコさんのそんな日常#3 『ダメイコさんぺろぺろ』

1.

KAITO

「良いからアイス返せよ！」

ダメイコさん

「えー。これじゃ駄目ー？」

2.

KAITO

「駄目だって言ってるだろ！ちゃんと新しいの買ってきて来いよ！」

3.

ダメイコ

「しょうがないなー。ほれちこつよれ、この手をお舐め」

KAITO

「（げっそり）……一応聞いてやる。何故だ」

4 .

ダメイコさん

「ほーら、アイスのエキスが身体から噴出してるとしょー？」

K A I T O

「してねえよ」

ダメイコさんのそんな日常#4『ダメイコさんの大親友』（前書き）

前回更新から半年振りくらいの更新で申し訳ないです！

ネタ切れじゃないよ！！

書き続けてはいたものの、肝心の4コマ漫画になる気配が無かったので更新どうしようかなーと迷ってたんです。

私自身が絵を描けないので、4コマ漫画はもう無理かも……（泣）
文章だけでどれだけ私の思いが伝わるかどうかは分かりませんが、
精一杯やってみようと思います。

それでは本文へ！

ダメイコさんのそんな日常#4『ダメイコさんの大親友』

ダメイコさんのそんな日常#4『ダメイコさんの大親友』

1.

ダメイコさん

「だって外寒いしー、こたつの中あつたかいしー。動きたくない」

KAITO

「……はあ。だからこたつなんて出しくなかつたんだよ、こんなナマケモノ生産装置」

2.

ダメイコさん

「むむ！あたしの事はさておき、大親友おこたんの悪口とは聞き捨てなりません！」

KAITO

「自分がナマケモノ扱いされるのは良いんだ……。つていうか親友つて。それも大親友つて。どんだけこたつと仲良しなんだよ冬場しか出さないのにこたつ」

3.

ダメイコさん

「まあでも付き合い長いから分かるんだけど、おこたんにも苦手分野とかあるのよねー」

KAITO

「……？何それ」

4 .

ダメイコさん

「熱爛が何時まで経っても温まらない。中に入れといてもさっぱりなのよ」

KAITO

「キッチンにくらい出向けよ」

ダメイコさんのそんな日常#4『ダメイコさんの大親友』（後書き）

ネタが今年の一月当初のものである為、季節感が全く無いという事に気付く。どうしてこうなった！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4361n/>

ばーかろいど ぱにつく！！

2011年10月7日13時53分発行